

月

影



第54号

平成二十八年五月十五日発行

浄土宗西山禅林寺派

常林院

得^えたるものが

得^{とく}ではない

失^なくしたものが

損^{そん}ではない



得^えること

何かを

失^{うし}うこともあり

失^ううことで

何かを

得^えることもある

損^{そん}得^{とく}を越^こえた

その先^{まへ}に

真^ま実^{じつ}が隠^{かく}れている



阿弥陀如来

阿あ弥み陀だ如に来よは、私わたしたち浄土宗西山禅林寺派せいざんぜんりんじは

のご本尊です。我が宗派以外にも知恩院、浄土真宗など、浄土宗系のご本尊です。

阿弥陀如来は、西方極楽浄土におられます。アミダの「アミ」は量ることの出来ない無量・無限という意味で、無量光如来（アミタバ）とも無量寿如来（アミターニス）とも呼ばれます。

四十八の願い

阿弥陀如来はもともとインドの王子でした。出家して法蔵菩薩という菩薩となり、私たち衆生を救う為に四十八の願いを建て、仏（如来）になることを誓い、十劫という長い時間修行をされて阿弥陀如来となりました。

お念仏で往生

阿弥陀如来が誓われた四十八願の中で、十番目の「念仏をおこなうものは必ず往生させる」という願いは特に大切なものです。お念仏とは「南無阿弥陀仏」と唱えること。「南無」は「おまかせ

します」という意味です。つまり、お念仏とは阿弥陀如来にすべておまかせします、ということです。



常林院本尊阿弥陀如来

ひじを曲げる速さ

浄土宗の教えは、お念仏を唱えれば極楽へ往生できるという教えです。命終わる時には、阿弥陀如来自らが私たちの所まで迎えに来て下さいます。その速さは、肘（ひじ）を曲げる速さで、すぐさま私た

ちの所に迎えに来て下さるといわれています。子を見守るように

月影のいたらぬ里は
なけれども
ながむる人の
心にぞすむ

月光のように阿弥陀如来の慈悲の光は、私たちを静かに照らしています。

私たちが礼拝すれば、阿弥陀如来はその姿を見られ、私たちがお念仏を唱えれば、その声を聞かれ、私たちが阿弥陀如来を想えば、阿弥陀如来も私たちのことを想っておられます。

仏事と作法

中陰

中陰とは、死の瞬間から次の生をうけるまでの間の期間のことをいいます。

これは、仏教がおこる前からインドにあった輪廻転生という死生観からおこっています。当時の人々は、命が終わると、また何かに生まれ変わり、まるで車輪が回転するように続いていくと考えられています。

七日ごと

この生まれ変わりは



七日単位で生まれ変わるとされています。初七日を逸した者は二七日で、二七日を逸した者は三七日で、そして、四七日、五七日・・・と続き、どのような者でも七七日を越えず、次の生を受けるといわれます。七七日（七×七＝四十九日）を中陰が満ちたので満中陰といえます。

中陰は方便

本来、仏教は輪廻転生の考えをとりませんから、中陰思想もありません。

私たちの宗派では、「南無阿弥陀仏」とお念仏を唱えれば、また

は、唱えることができないう状態の人は、お念仏を耳にすれば、ただちに阿弥陀仏が迎えに来て下さり極楽へ往生できるのです。したがって、中陰の状態を受けることはないのです。しかし、仏教を分かりやすく説く為に中陰思想を方便（真実を説く為の手立て）としてとりいれてきました。

蓮の花となつて

人は極楽へ往生した後、お浄土の池の蓮の中に生まれます。しかし、生前



の行いによって華が開く時期に早い遅いの差があると經典に説かれ

ています。中陰法要は一刻も早く華が開くように、亡くなった人と共に懺悔するので。そして、残されたご家族にとつては、心を落ち着かせ、気持ちの整理をする大切な期間です。生前の姿を思い起こす中で、その生き方に学び、思いを受け継ぎ、「こんな人だったね」と家族で思いを共有し、子や孫に伝えていくことで、故人の魂は子々孫々、みんなの心の中で生き続けることができるのです。

供養とは

へ思い出すこと・受け継ぐこと・伝えること・忘れないこと

彩寺記



春の彼岸会

去る三月二十日の春

分の日。当寺の春の彼岸会を勤めました。

彼岸会法要では、水塔婆回向をお申込み頂いた檀信徒様のご先祖供養をさせて頂きました。

法要の後、尺八と琴の演奏会を催しました。尺八は島田道雪先生、琴は島田雅楽恭先生とそのお弟子さんに演奏して頂きました。参拝者一同、心静かに音色に耳を傾け、よく知っている曲では一緒に歌い、楽しいひとときを

過ごすことができました。お参り頂いた皆様有り難うございました。

♪演奏曲目

- ・ 荒城の月
- ・ おぼろ月夜
- ・ うさぎ
- ・ 星空への想い
- ・ 月光弄笛
- ・ 浜辺の歌 等



尺八と琴の音が響く本堂

常林院彼岸会

春の彼岸会は春分の日
秋の彼岸会は秋分の日

お釈迦さまの

お言葉



他人がしたこと、しなかったことに目を向けるな。ただ、自分がやったこと、やらなかったことだけを見つめよ。

ダンマパダ (法句経)

「比べると苦が生まれ 他人と比較すること」と分かってはいても、人はつい周りの人と自分を比べてしまいます。

他人が誉められると ^{あせ}焦ったり、妬 ^{ねた}んだり。反対に、他人が失敗すると安心したり。常に自分自身のことよりも周りのことを気にして過ごしています。

他人と比較することは、意味もなく心を動揺させ良いことはありません。

お釈迦さまは、他人を気にせず、自分の行いだけをしっかりと見つめることで、自分を高めていくことが何よりも大切であると説いておられます。